昭和46年 8 月29日発行通巻25号(毎日曜日発行) 昭和46年 2 月 5 日国鉄首都特別扱承認雑誌第516号

AE 朝日=ラルース

8/29
220円
25

週刊 世界動物百科



朝日新聞社

読者のみなさまへ

こんな動物が登場します　動物を機械的に五十音順に並べたものではありません。系統だった分類に従って，われわれの親しみやすいサル類から始め，次の順序と冊数でお届けしています。概説(２)，哺乳類(62)，鳥類(64)，爬虫・両生類(16)，魚類(16)，軟体動物・昆虫類・甲殻類・腔腸動物などの無脊椎動物(32)。《１～64号の内容は表３参照》

総目次と総索引がつきます　見て，読んで，楽しむ〝百科〟としてだけではなく，引いて調べる〝事典〟としての機能を完全にするため，16冊ごとにその総目次をつけ，また最終192号には詳細な総索引をつけます。この両者によって，動物界の構成がひと目で理解でき，調べたい動物がすぐ引きだせます。

『私たちの仲間』のページ　カラーページをより理解しやすいものにするため，日本の第一線動物学者の執筆による解説や注があります。また〝動物週刊誌〟として，動物界のニュースや話題，楽しい読物，実用記事などを掲載しています。

ファイルで保存してください　全192冊を，発行順に16冊ずつ，美しいファイル（販売中・定価600円）に，とじこんでください。堅牢で豪華な，全12巻の〝動物百科事典〟がそろいます。途中から購読されたかたは，ぜひ第１号からおそろえください。バックナンバーのお求めは，このページ右欄『本誌の購読について』をごらんください。

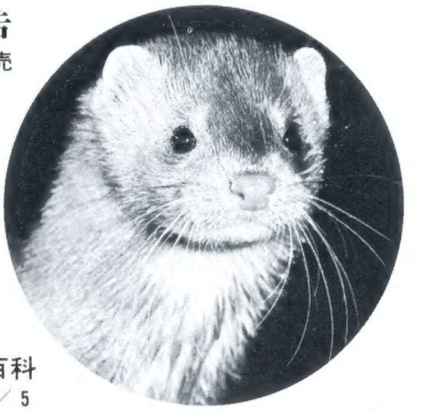
目　次

世界動物百科　第 25 号

凡　例
□本文中〔　〕を使ったものは，日本版のために付加した説明である。
□くわしい注釈が必要なものには，その語のあとに〔注１〕と番号を入れ，『私たちの仲間』第27ページに，同番号で記載した。
□動物の種名は，原則として和名（一般に通用している外来語を含む），学名（イタリック）の順で表記した。
和名の多いものについては，併記したものもあるが，専門家と相談のうえ編集部で決定した。
和名のないものは，英名または仏名をカナ書きで入れ，原語（ローマン）を付記した。
□人名，地名は，本人または，現地読みを原則としたが，慣用の固定しているものはそれに従った。

本誌の購読について
本誌は，全国の書店，朝日新聞販売店で取り扱っております。
毎週定期的に，配達をご希望されるかたは，お近くの，取扱店にお申込み下さい。
なお，本社直接購入のご希望は，下記あてお申込みを願います。送料は，１部につき30円です。
朝日新聞東京本社出版業務部
東京都千代田区有楽町2－3　〒100 TEL 03－212－0131
朝日新聞大阪本社出版業務部
大阪市北区中之島３－３　〒530 TEL 06－231－0131
朝日新聞西部本社販売部出版業務課
北九州市小倉区砂津1－12－1　〒802 TEL 093－53－1131
朝日新聞名古屋本社販売部出版業務係
名古屋市中区栄１－３－３　〒460 TEL052－231－8131

次号予告
8月25日発売



世界動物百科
26号　9／5

カラーページ

食肉目 裂脚亜目 イタチ科
□イタチ属（つづき）
アメリカミンク
イイズナ
オコジョ
ケナガイタチ
フェレット

ご婦人のミンクのコートを１着つくるのに，何枚(匹)の皮が必要と思いますか。驚くなかれ！　70枚以上も必要なのです。それを身につけていい気になっている人間。同じ「動物」であるはずなのにね……。

私たちの仲間

「革命」は動物の生き方を変えた　藤堂明保
――中国動物散歩――
未来の巨獣はヘビ形哺乳動物　G.5プラス１
（陸生動物の大きさを探る　4）
もうひとつの世界　21
野ネズミの天敵，ニホンイタチ　犬飼哲夫
カラーページ解説
よだれと白旗　畑　正憲
ヒグマと２人のイノシシ　24
くもとなまずのけんか　稲田和子
鳥獣むかしばなし　4（最終回）
「メナム」はスイカがお好き〈グラフ特集〉
〝暑さ〟からの自衛　高木健太郎
夏と動物〈下〉

私たちの仲間
25号…8月29日

ヒグマと2人のイノシシ 23

ケネボク島の新しい家

畑　正憲



ケネボク（崍暮帰）島は
夏にコンブ漁の人がわずかに住むだけの
"無人島"だ

まだどんべえを前から抱くのは危険だった。彼女は幼児期に突入したばかりで，経験の外皮でくるまぬ魂そのものをむき出しにして生き，親から受けついだ本能を十二分に活用していた。だからしなだれかかった次の瞬間，あるかなきかの異常を感じ取って暴れたりした。

そのひとつとして，人のおびえを読み取るどんべえの能力はこわいくらいだった。彼女と遊んでいるうちに，つい危い位置で相対するようになる。そんな時，いけないぞ，体の向きを変えねば，とつい思いがちだ。するとどんべえは，その時もっとも自分の口に近い僕の体を，容赦なくガブリとやった。

異質なもの，実の親では決して示さぬ異常な気配を，体のどこかで感知しているに違いなかった。そういう神秘的な鋭さが野性というものだろうか。

それでもかなり進歩したのは事実である。咬む回数は驚異的に減ったし，あの鋭い爪に関する限り，まったく気を許せるようになった。上になり下になり，どんべえとたわむれる。ボクシングでありレスリング——しかも，反則が規定されていないデスマッチをやっていても，間違っても爪を立てなくなった。

僕はそういうどんべえを連れて島へ渡った。夢にまで見た無人島へ。

無人島といっても，ケネボク島は絶海の孤島ではない。本土から舟で20分ほどだし，夏にはコンブ漁の番屋に人が住む。この人たちは，年間22日だけここでコンブをとるのである。

けれどもその他の日々は，ここには人が住まぬ。年間300数十日，人の声がしない島である。だから，厳密に言えば無人島ではないが，年間300日以上無人の島を経験出来れば，僕たちにとっては立派な無人島である。

そこへ僕は10坪の家を建てた。

といっても，僕の名義ではない。地主さんの名で登記し，僕は2年間だけ地主さんから借用することにした。

何故そうしたのか。

非常に勝手ではあるが，私有財産，特に不動産に対して，僕がいわれのない恐怖を持っているせいだ。僕は生きている限り，随筆やノンフィクションを書いていきたいと思っている。それはさまざまな職業をわたり歩いた後で，これぞと思い定めた生涯の方向である。

その目標を貫き通すために，僕は放浪者でありたい。家や土地を持って，そこへぬくぬくと住みついたりしていては，長年抱いてきた夢を実現出来ぬ。僕は自分が本質的にはナマケモノであることをよく知っているので，落ち着くべき安楽な住居を持つことに恐怖を覚えるのだ。

触れてみたい，のぞいてみたい，体験してみたい——僕は欲張りだから，そういうものがたくさんある。それを実現するためなら，何も要らぬ。不動産なんて邪魔になるだけだ。

それでもこのケネボク島だけは心底欲しかった。住むだけでは飽き足らず，ここを動物の楽園にしたかったからだ。

そこで，僕は町役場の方に口がすっぱくなるほど繰り返した。

「時価の倍額で町が買っていただけないでしょうか。もちろんそのお金は，僕に払わせて下さい。町の共有財産にして，日本に例のない子供たちと動物の公園にしましょう」

その僕の提案に真剣に賛同して下さる方もいた。けれどもケチな人がいて，勝手に地主との間を往復し，僕への言い値と地主への提示額に300万円の差をつけ，それだけ着服しようとしたりした。

こういったゴタゴタは僕の性に合わぬ。動物と四六時中つき合っているせいかもしれぬが，特に最近，利にまつわるかけひきに憂き身をやつす人とは，口をきくのさえ大儀になった。そういう意味では，人は厭な動物である。どうしてもっと素直に会話がかわせないのか。

この島は切餅の形をして，漁業に利用出来る浜はごく僅かである。島の上は平たくなった原野で，現在は利用する人もなく放りだされている。

道立自然公園の一部ではあるが，植物相は貧弱で，荒れ地を好むスズランの群落があったり，徐々にセイヨウタンポポが勢力範囲を広げつつある。

利用出来るとしたら，観光ぐらいだろ



どんべえは，はじめて舟にのせられて，無人島へ渡った



波打ちぎわの，あき地に建てた新しい家

う。事実，僕の移住が世間で取沙汰され始めてからというもの，島を買いたいという観光業者からの問い合わせが町役場に殺到した。その中には東映の大川社長のものもあるとかで，その手紙の束を見て，僕はアゼンとせざるを得なかった。

独創性がなく，人の計画に鉄面皮で割り込むこういう人たちを僕は嫌いだ。買うなら買うがいい。道庁までいって確かめたところによると，道立の自然公園だからホテルを建てることは出来ぬそうだ。値をつりあげて買った後で，たぶん後悔するだろう。島の植物相が貧弱なのは，その昔，まだ軍馬がふんだんに必要だった頃，島の平原をウマの牧場にしていたからである。ウマが食い荒らし，その後に牧草の種をまいているので，自然公園のイメージからはほど遠い。

もうよそう。利にさとい人々の子守歌を聞きながら，ケネボクよ，今しばらく眠り続けるがいい。僕はその廂を借りて，無人の地で実験をすすめればそれでいい。その後本格的な僕の動物園を建設する土地は，すでに30万坪ほど手に入れた。

新しい住居へ移ったどんべえは，しばらく落ち着きを失った。家のあらゆる部分を舐め，壊せるものであれば，徹底的に攻撃の矢を向けた。咬み，引張り，引き裂かねば好奇心が満足されないようだった。特に，食物の匂いがする台所は興味の的らしく，油断をしていると這い上がって手当たり次第ものを壊した。

娘が好きなのも困りものだった。どんべえとしてはジャレているつもりだろうが，僕のように意志で痛覚をにぶらせているわけではないから，娘は悲鳴を上げて逃げまわった。そこで，当分の間，娘の住居は押入れの上段になったし，台所は押入れのフスマをはずして入口を封鎖されてしまった。食事の用意をする際には，ヤッコラサとばかりにこのバリケードを越えねばならぬ。妻にはこの労働が苦手らしいので，天井からロープをつるし，それをつかまえて乗り越える工夫がこらされた。

普通の住居というものは，人が住むように設計されていて，ヒグマの子の行動まで考慮に入れられてはいない。島の家はうかつにもその人の住居であり，改善しなければならぬ点が実に多かった。

一例をあげるなら便所がそうだ。どんべえは異なった匂いを嗅ぎ当て，しきりに便所の中へ入ろうとした。

そう決意したら，人が叱った位ではどうにもなるものじゃない。意志を貫き通す点では，クマの子はまさにアッパレという他はなかった。爪で，歯で，数度いどんでいるうちに簡単に戸を開けられるようになってしまった。

これは一大事である。どんべえが糞だめへ落ちる危険もあったし，第一，大便をしている時の人間は最も防備が手薄である。何とかしなければ，と僕たちは知恵をしぼり，結局外からねじこみ式のカギをつけて解決した。

だから，わが家の便所は，

「トン，トン」

「入ってます」

という世間の常識とは逆になった。

中からノックをし，

「済みました。出して下さい」

と外の人へ頼むのである。

それでも人が入って大便をし始めたら，どんべえは便所の前に居坐って戸を爪で引っかいたし，僅かにあるすき間に鼻先を押し当て，中からもれてくる匂いを真剣に嗅いだ。

これは仕方のないことだ。野生動物にとって，他の動物の糞の匂いは大切な情報源である。僕はいろいろな動物の糞をどんべえの前に置いてみたが，彼女はどんなに美味しい御馳走より，その方へ注意を集中した。雑食性で匂いが強い人間の糞がその例外でないのはいたし方がない。ゆっくり時間をかけて，なれて貰うより手がないのである。

ムチと素手と

さて，どんべえがジャレる度合は，島へ渡っても変わったわけではなかった。私と弟，それから妻の手や足は，予想した以上に食い破られ，二目と見られない惨状を呈した。

けれども，手袋を使う気にはなれなかった。人が手を差し出すと，彼女は嗅いで舐めてみる。匂いと味で一生懸命人を憶えようとしている以上，素肌の教育は大切であると僕は確信していた。

食事をさせる時が，教育のチャンスでもあった。

パンにたっぷりバターを塗って，ミルクでやわらかくして与えてみると，どんべえはかぶりついてきた。しかも，食事をする時には表情が違う。おだやかで，やさしくって，人を頼る気持があふれていた。

事実，手から食べさせ始めると，食事の間だけだったが，どんべえは飼いネコ同然になった。坐ったり，ひざの上に乗ったり，僕のからだにからみついておねだりをする。

僕は，山で撃たれた母グマの乳房を思い出さざるを得なかった。白くて，爪跡ひとつなかったすべすべした乳首を。

食べるという動作，乳を飲むという動作は，動物の心をなごませるのである。

前に触れたイヌやネコの乳房の傷は，多産であるせいでもあろう。1匹の子イヌが乳を吸う音が他の子イヌの食欲を刺激し，争わでもの乳首を奪いあう。だから，痛々しい傷が増えるのである。

人でもそうだ。外国人から見ると，日本の映画やテレビドラマにはものを食べるシーンが多いのが不思議であるそうだが，家庭的ななごやかさを表現する際には，つい食事の場面を撮影しがちだ。

考えてみれば，泣いて食べ，笑って食べることはままある。しかし，激怒したり，喧嘩をしながら食事をする人はまずいまい。そういう時には，箸を投げだして，席を立つのが普通だ。

ともあれ，食事の際，どんべえがおとなしくなるのはめっけものだった。僕は左手で餌を与えながら，右手で彼女のからだをいじくりまわした。

手を持ち，足をさわり，背を撫で，脇の下をくすぐる。腹をさわると，マッチの頭大の乳首がついていた。

これは大切な訓練である。野生動物や注意深く飼われていないイヌには，からだに触れられるのを嫌い，手で触れようものなら毛を逆立てて怒るものが多い。

それは野外においては意味もあろう。がしかし，人と共同生活を営む場合には，愛撫の手を嫌わしてはならぬ。むし



え　貝原平助

ろ積極的にからだに触れ，野外では終生持てなかっただろう感覚を新しく開発してやらねばならぬ。

その効果は徐々に現われ，素手をきつく咬む回数が減ってきた。

だが，ジャンパーの上から咬む際には容赦を知らなかった。食らいついて，顔を左右に振り，人がどなった位では絶対に離さない。

僕は怒るよりも呆れ，感心さえした。

さすがに山おやじの子供である。屈服を知らず，鼻にしっぺをした位では，後退してすぐさま向かってきた。

つい手荒に突き放しても，ひるまないしあきらめない。イヌのように尻尾を巻いて物陰に隠れるなんて，死よりも羞ずかしいと思っているかに見えたりした。

その姿を見て弟が讃嘆した。

「たいした奴だ。小さいながら王様じゃないか」

「それでも」

と，僕はどんべえを目で追いつつ，

「一度，決着をつけねばならないよ。早い機会に，参った，を言わせる必要がある。かわいがるばかりで猛獣が人に慣れると思ったら大間違いだ。そんな綺麗ごとで，人とヒグマの交流が成立したりはしないと思うよ。いつか両者の生存の条件がぶつかりあって火花を散らす……それでなければ，どんべえは僕たちのものにはならないさ」

「そうかなあ。殴るのかい」

「殴る必要が生じるかもしれない。あるいはそれ以上のおしおきをしなければならぬ時がくるかもしれない」

「厭だなあ。サーカス的な調教をやらないって言うから，おれはこの話に乗ったのだぜ。兄貴とおれが同じ部屋に寝ていて，夜なんか交互に甘えにくるじゃないか。人間でいえば，西も東もわからない赤ん坊だよ，どんべえは。それを殴ったり出来るものか」

弟は体力にすぐれ，高校時代，他校の荒くれ10数人を相手にしてたった1人で喧嘩をしたり，大学へ行く代わりにプロボクサーの修業をしたりした。パンチがあり過ぎて，手首を骨折してカメラを持つようになったが，今ではそういう生活をきれいさっぱり忘れ果て，荒い声をだすどころか，どんな無理でも聞いてくれる親切なおじさんとして近所の子供から慕われている。ヒグマから牙を抜いてカイウサギの心を植えつけたようだ。

端から，たとえば僕から見れば，かつてのすさんだ生活が基礎になって，現在の彼がつくられているのがよくわかる。でも彼は，咬んだり咬まれたりしてこそ，生きものが共存出来る関係が創造されることを忘れている。

咬むといえば，東京を発つ際，動物人間の1人が教えてくれた。





食事をするときには
やっとおとなしくなったが……

素手をきつくかむ回数は
徐々に減っていった

「チンパンジーの子供に，人間を咬まないことを教えるには，こちらから咬んでやるのがいいそうだよ」

それで，お互いの口をどう利用するかを，相手に納得させるのだそうだ。もちろん僕は，それでわかるものならと，どんべえを押えつけて咬んでみた。

だが，クマの体毛は深く，皮膚には弾力がある。おまけに，僕には前歯がないので，いたずらに空振りしてほっぺたに爪跡をつけられるだけだった。

弟が言うサーカス的な調教とは，ごく小さいうちに，棒やムチで殴って殴って殴り抜くことである。相手の腰が抜けようが，声がかれようが一切意に介しない。ムチを絶対的な神様に仕立て上げる。それから砂糖でツルのである。

それでも従わないのなら，四肢を棒でしばって，更に責め，食事を与えない。そういう責苦を通して，動物に芸を教えるのである。

それなら僕にも自信がある。心を鬼にして棒でひっぱたくのなら，ヒグマ・サーカスを作って，全国を巡業することだって出来よう。

しかし，それは本意ではない。サーカス的な調教をする位なら，ヒグマを手がけはしない。第一，素手を咬ましたりしない。どんなものになるのか見当もつかぬが，もっと自由な，もっと伸び伸びした関係を樹立したいのだ。たとえば人とイヌが共存しているような。

ここに矛盾がある。ヒグマはヒグマであり，人の言葉はわからない。しかも鉄の爪と牙を持っている。体罰を与える以外で，人と共存するルールを教えるなんて出来そうもない。

だから僕はユーウツになるのだ。動物を飼うのはもうやめようと何度も思う。かわいがっている動物を殴った後のあのわびしい，砂を嚙むような気分は二度と味わいたくない。だが，とは言っても，体罰を与えねばならぬ。

「いじけるからやめてくれよ」

弟がとめたが，僕は目をつむって，どんべえに平手打ちを食わせていた。■

ひとり娘の明日美ちゃんは
押入れの上段に避難した



もうひとつの世界
20
グループ・5プラス1

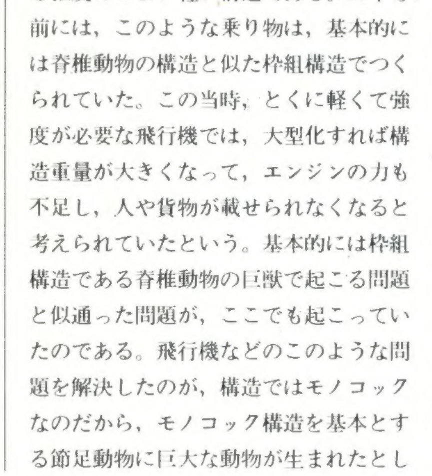
陸生動物の大きさを探る　3

次の巨大動物はナメクジか

恐竜以後，脊椎（せきつい）動物で巨体になる可能性のある動物は，哺乳（ほにゅう）類に属する動物であると考えられるが，哺乳類が体温を一定に保つ生理機能をもっていることが，恐竜以上の巨体になる妨げになっている。とすれば，恐竜こそはほんとうに空前絶後の巨大な動物であると考えざるをえない。しかし，陸上には脊椎動物以外にたくさんの種類の動物が生息し，脊椎動物とは異なった機構で体重をささえている。それでは，脊椎動物以外の動物の陸上でのからだのささえ方と，このような動物から巨大動物が生まれる可能性があるかどうかを考えてみよう。

脊椎動物以外に，骨格でからだをささえている動物に，外骨格をもつ動物がいる。昆虫（こんちゅう）やエビ，カニなどが属する節足動物である。外骨格は基本的には，ニワトリの卵の殻のようなモノコック構造であって，脊椎動物の内骨格のような枠組の構造より構造重量当たりささえられる重量はかなり大きい。

モノコック構造は，近ごろは自動車，電車の車体，飛行機などに用いられている強度のつよい軽い構造である。50年も前には，このような乗り物は，基本的には脊椎動物の構造と似た枠組構造でつくられていた。この当時，とくに軽くて強度が必要な飛行機では，大型化すれば構造重量が大きくなって，エンジンの力も不足し，人や貨物が載せられなくなると考えられていたという。基本的には枠組構造である脊椎動物の巨獣で起こる問題と似通った問題が，ここでも起こっていたのである。飛行機などのこのような問題を解決したのが，構造ではモノコックなのだから，モノコック構造を基本とする節足動物に巨大な動物が生まれたとしても，すこしも不思議ではない。



脱皮するカニ　節足動物は成長するとき，脱皮して外骨格をつくりなおす　　え　清水　勝

外骨格の材質も軽くてじょうぶな多糖類のキチンが主成分であり，炭酸カルシウムで外骨格を補強した動物もあるが，構造材質としてはすぐれたものである。構造の材質も，構造そのものもすぐれているのに，節足動物には巨大な動物はいない。脊椎動物より長い節足動物の歴史を見渡しても，化石に大きなトンボがあるくらいで，これといった巨大な動物はいない。不思議なことに，ほとんどが小型の動物ばかりである。

現在までの外骨格の動物が巨大でないからといって，巨大な動物が節足動物のなかから出現しないとは推断できない。しかし，外骨格の動物が巨大になれないのは，構造としては有利なはずの外骨格のためなのである。動物が大きくなるには，必ず成長という過程がつきものである。成長するときには，一定容量しかもっていない外骨格を根本的につくりなおさなければ，構造上大きな動物を収容することはできないし，力学的な強度も保てない。

節足動物は，からだが大きくなるとき，脱皮をして外骨格をつくりなおしている。だから，節足動物は脱皮後外骨格が硬化するまでの間は，脱皮後の薄くて弱い外骨格で，からだの形を保てる程度の大きさが限界であろう。陸生を主としているある種のカニなどが，少なくとも生涯の一部を水中で送るのは，脱皮後のからだを水の浮力でささえる必要があることも，理由の1つであろう。むしろ，枠組構造の骨をもつ脊椎動物のほうが，骨格の根本的なつくりかえの必要なく成長できるから，構造的には有利な外骨格をもつ動物より，巨大化に適している。

骨格をもつ動物は，すでに生存した恐竜より，大きくなれる可能性は少ない。それでは骨格でからだをささえていない動物には，巨大な動物になる可能性はないのだろうか。陸上で，骨格ではなく，筋肉や結合組織でからだの形を保っている動物には，ミミズのような環形動物や，ナメクジのような軟体動物がある。これらの動物は筋肉によって内圧をつくり，その内圧でゴム風船のように形を保っている。

ミミズやナメクジのような動物は，胴によってからだをささえているので，足でからだをささえる動物とは違って，力学的には長さはいくら長くてもよい。問題は太さだけである。太さについては，ミミズやナメクジは相似形で，太くなれば，からだをとりまく環状の筋肉の厚さは，2乗倍で増加するが，体重は3乗倍で増加するという問題がここにも生ずる。筋肉の力は筋肉の断面積に比例するから，からだが太くなれば，環状の筋肉の厚さはもっと厚くなる必要がある。



え　清水　勝

メガネウラ　石炭紀に生息した巨大なトンボ。史上最大の昆虫でハネの全長は70～80センチもある

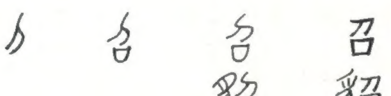
ミミズに例をとって考えてみよう。ミミズは形を保つのに，環状筋のすべての力を使ってはいない。少なくとも数倍の余裕がある。ミミズが巨大化して，環状筋のすべての力を，形を保つのに用い，体重の60パーセントは他の生きるために必要な器官にあてるとすれば，直径50センチぐらいのミミズが可能である。多少余裕をもたせても，30センチぐらいの太さで，長さはいくら長くても，計算上はさしつかえない。形にこだわらず，水枕のようにぶよぶよでよいならば，結合組織や筋肉などでつくられた体壁は，厚さ1センチもあれば1気圧程度には耐えられるから，1センチの体壁をもてば10メートルの太さの動物ができる。

しかし，現在の常識的な生物学の知見では，この動物は運動，呼吸，消化等すべての生理的な面からみて，生存可能であるとは考えられない。この巨大な動物が地上に生まれるには，地球の環境が変化し，他の動物がほとんど絶滅した後のことであろう。そしてそのときには，この巨大動物は現在未知の生理的機能をそなえているはずである。

しかし，この巨大動物のように空想的なものではなく，もう少し現実的な動物が巨大化しないものだろうか。次にはその可能性を検討してみよう。■　（G）

漢字のふるさと　20

藤堂明保



貂（てん）　中国では，チョウ tiao（ローマ字では diao）といい，日本ではテンと呼ぶ。中国の東北地方（満州），とりわけアムール川（黒龍江）の中上流や，シンアンリン山脈（興安嶺）あたりがその産地である。夏はこげ茶色であるが，冬には黄色い毛にかわり，尾と頭は白みをおびる。ミンクと同じくイタチ科に属する。ミンクは北アメリカ産でその毛皮が欧米人に愛用されるが，「貂皮」は中国人の最も好む毛皮である。

貂という字は，「獣を表わす記号」＋「召」から成る字である。背がゆるい曲線をなしたカタナを「刀」といい，手をゆるく曲線状にまげて，ゆらゆらとまねきよせるのを「召」「招」という。またゆるい曲線を描いて，ゆらりと飛ぶのを「超」という。

してみると，貂という名称は，テンが身を曲線状にくねらせて，ユラユラと波うつように走ることからきたのであろう。また，その毛皮がしなやかで，ゆるい曲線を描いて垂れるからだとも考えてよかろう。

中国では，貂の毛皮は昔から貴重品であった。「貂蝉」といえば，漢代の高位高官の者がかぶる冠の飾りで，テンの尾とセミの羽になぞらえた金箔とで作られた。また，3世紀に貂蝉という絶世の美人歌姫がいて，その奪いあいから，呂布と董卓という2人の大将が殺し合いの争いを演じたという。（三国志）

美女の名となるほど，貂は美しくしなやかで，珍貴なものであったのだ。■



ソリラ。イタチ科。別名アフリカスカンク。
スカンクに似ているが，目の上の白いはちまきと
前足の４本指とで，スカンクと区別できる。
アフリカ中南部一帯の岩地にすみ
体長約35センチ，尾長25センチほど。

PH. F. PETTER

25－1



ゾリラ属　*Zorilla*

ゾリラ　*Zorilla striata*

ゾリラは，その外見や習性がスカンクにきわめてよく似ているため，また，生息地がアフリカであることから，《アフリカスカンク》とあだ名されている。体形は長く，体高の低い，小型のイタチ科動物である。

体長はおよそ35センチ。尾長は25センチくらいで，毛が密生しており，羽根飾りのような形をしている。指行（しこう）性の動物で，足のうらは毛におおわれ，４本の指には大きなかぎづめがある。このつめは引っこめることができない。

頭は幅広く，鼻先がとがり，耳は小さくてまるい。被毛はスカンクにくらべると，それほど密ではないが同じくらい長く，色と模様はかなりよく似ている。すなわち，光沢を帯びた深い黒色の地に白い模様が，顔面ではまだら，背では帯状になって，浮きでている。

さらに肛門腺（こうもんせん）は，身を守るための臭気の強い液体を分泌（ぶんぴ）するが，その臭気はスカンクのものに匹敵する。

ゾリラはアフリカ特産で，南アフリカ共和国にいるキボウホウゾリラ *Zorilla capensis* も，この仲間である。そのほか，近縁の種としては，リビアからスーダンにかけて生息するリビアゾリラ *Poecilictis lybica*，そしてサハラ砂漠の南側地域にすむシロクビゾリラ *Poecilogale albinucha* があげられる。

岩石地帯に好んですみ，自然の穴，あるいは樹木や茂みの下に自分でくぼみを掘って，そこに身をひそめている。しかし，ふつうは他の動物の穴を占領することが多い。

完全な夜行性の動物で，動作はどちらかといえばゆっくりしている。走る速度はマングースよりもおそく，木登りは得意ではなく，水にはいることもいやがる。もっとも，必要となれば，なかなかじょうずに泳ぐ。

えさは小型の哺乳（ほにゅう）動物，とくに齧歯（げっし）類，小鳥とその卵，両生類，および昆虫（こんちゅう）である。ときにはニワトリ小屋などに侵入して，気の荒いことで知られる，ムナジロテンに匹敵するほどの損害を与えることがある。危険に直面すると，敵を驚かせようと毛をさか立てる。そのため攻撃的な動物だと思われがちだが，実際はそうではない。

スカンクと同じように，その主たる武器である臭気は，まったく身を守るためだけのものである。追いつめられると後ろ向きになり，しっぽを上げ，前肢（ぜんし）を地につけ後半身を起こし，敵に肛門腺からの分泌物をひっかける。その液体は，吐きけをもよおさせるほど臭いので，スーダンの人びとは，その液体を《悪臭の親王》と呼んでいるほどである。

スカンクの場合と同じく，雄は雌より臭気の強い分泌物を出す。また発情期には，臭気はいっそう耐えがたいものになる。ゾリラは分泌物を，正確に目標に命中させるので，この油性の液を顔に受けて，目が見えなくなった動物もあるといわれる。

こうした臭気の実力を見せつけるだけで，ふつうはじゅうぶんに敵の戦意をくじくことができるが，ときたまさらに攻撃されるようなことがあると，ゾリラは最後の手段として奇妙なことをする。つまり，死んだふりをするのである。

１腹に２，３匹の子が，母親の掘った巣穴や，他の動物から占領した穴で生まれる。

ゾリラ。イタチ科。夜になると，岩穴からとびだしネズミや昆虫，カエルなどをあさる。
長い尾を背中のほうへもちあげて歩くのが特徴。
性質はおとなしくて，飼いやすいが
いじめると，肛門腺から悪臭を出すから危険。
PH. PETTER-IMAGES ET TEXTES

グリソン属　*Grison*

グリソン　*Grison vittatus*

グリソンのからだはほっそりしており，首が太く，四肢（しし）は小さく，フェレットに似ているが，尾はそれより短い。体長は約45センチ，尾長は15センチである。足のうらには毛がなく，５本の指には水かきがある。

毛は短く，なめらかで，特徴のある毛並みをしている。顔とわき腹，それに腹部は黒みが強く，頭の上部と背中は灰色である。その境めを，１本の白い線が走っており，この２つの部分を区切っている。こういう配色のおかげで，月の明るい夜にも，強敵である夜行性の猛禽類からのがれることができるし，自分が獲物をねらうときにも，周囲の色にまぎれて目につかない。

グリソンは，南アメリカと，北はメキシコまでの中央アメリカに分布している。平地の農場や森にすみ，1200メートル以上の高地にはいない。

巣はふつう木のほら，岩の裂けめ，あるいは齧歯（げっし）類がすんでいた巣穴を利用する。地表で生活し，木には登らず，えさにする齧歯類を捜して，いつも穴から穴へとかぎまわっている。テンに劣らず他の動物を殺すことが好きで，空腹でなくとも，手当たりしだいに殺す。侵入者に対しては，その長い首をもたげて，ずるがしこく残忍そうな黒い目で見すえて追いはらう。

かつてはチンチラ〔齧歯目　ヤマアラシ亜目の動物で南アメリカのアンデスにすむ〕狩りのために，グリソンを調教していた。

グリソン。イタチ科。
からだの上半部の明るい色は
猛禽類から自分をカムフラージュするのに役だつ。
南アメリカと中央アメリカの平地にすみ
体長は約45センチ，尾長は15センチほど。（右）
PH. A. VISAGE-JACANA





動作は軽快で優美である。おこらせると，強いじゃこうのようなにおいをまき散らすが，がまんできないほど強くはないし，数時間で消えてしまう。ブラジルのいくつかの地方では，納屋のネズミなどを退治するのに，ひと役かっている。

子は秋に生まれ，母親に育てられる。南アメリカの人びとはグリソンの肉を食べ，その皮でみごとな細工物をつくる。そのために現地では，グリソン狩りが盛んである。

人間に対してはおとなしい動物で，つかまえやすく，飼いやすい。食物としては，肉類もくだものも，同じように好んで食べる。くだものはおもにプラムとサクランボである。もっとも，生きている動物を見ると食欲をそそられて，すぐにとびかかる。

タイラ属　*Galera*

タイラ　*Galera barbara*

タイラは，南アメリカに広く分布する大型のイタチ科動物で，その北限はメキシコである。全長は100センチを越え，そのうち40センチが尾である。からだは細長く，四肢(しし)は短く，足うらには毛がない。強いかぎづめをもっているが，このつめは引っこめることができない。

毛並みは短くてあらく，灰褐色である。頭と首は，白か灰色で，白または黄色のまだらが胸もとを飾っている。だがその毛色は，生息地の気候，高度に応じて変化している。湿潤な地方ではいっそう黒みがかっているが，乾燥した地方では，もっと明るい毛色になる。ふつう灰色の頭をしているので，メキシコでは《年寄り頭》と呼ばれている。また，色素のない白子がよく見られる。

つがいか，あるいは15～20頭の群れをなして，草原や密林で生活している。開けた土地では，ほかの動物が捨てた巣穴にすむが，森では木のほらに隠れている。非常に木登りがうまく，リスのように軽々と枝から枝へととび移り，追われると木の茂みに逃げこむ。地上でも同じように，身軽に行動する。

タイラは多くのイタチ科動物と違って，まったくの夜行性ではない。明けがた，獲物をとりに出かけ，昼を過ぎても巣には帰らない。あらゆる小型の哺乳（ほにゅう）動物，すな

グリソン。イタチ科。ふつうのイタチ科動物と違い木登りはうまくない。木にかじりついてはいるがその格好はやはりどこかあぶなっかしい。穴にひそむネズミなどを獲物にしており飼われると肉やくだものも食べる。（上）
PH. A. VISAGE JACANA



タイラ。イタチ科。
この動物は木登りの名人で
リスのように軽やかに木々を渡り
小鳥の巣を襲って，ひなや卵を食べている。
南アメリカ一帯とメキシコにすんでいる。（右）
PH. A. BROSSET



タイラ。頭部の色と毛が薄いため、メキシコ人は
親しみをこめて《年寄り頭》と呼んでいる。
実際は、なかなか獰猛な動物で
1日じゅう休みなく活動し、ネズミなどを襲う。
体長約60センチ、尾長40センチほどである。
PH. HOLMES-LEBEL



わちネズミの類，ウサギ，モルモットなどを捕えて食べる。ときには子ジカも襲う。高い木の上によじ登っては，鳥の巣をねらって，きわめて敏捷に動く。走るのはあまり速くないが，獲物のあとをしつこく追いつづけ，獲物をへとへとにさせてしまう。サトウキビやコーヒー豆も好きだ。ニワトリ小屋に忍びこんで，食べきれないほどのニワトリを殺し，損害を与えることもある。

タイラの食べ方はネコ族と同じで，頭を横にかしげて，肉を裂かずにかぶりつき，なめ，しゃぶる。食べ終わったあとには，これもまたネコと同じように，きまって，舌でていねいに毛づくろいをする。だがおこらせると，イタチ科の動物にもどって，肛門腺（こうもんせん）から，鼻につく臭い分泌（ぶんぴ）物を噴射する。

交尾期は早春である。雌は木々の根もとのあいだに巣をつくって，2匹の子を生む。子は生まれて2週間で，はじめて目を開く。

南アメリカにすむインディオの住居では，飼いならされたタイラをよく見かける。飼育生活には実によくなれて，12年も生きた例がある。声は，イヌのうなり声にかなりよく似ているという。



テン。イタチ科。
樹上がこの動物のホームグラウンド。
樹上で生まれ，樹上でリスを追う。
愛を語らい，巣を構えるのも，やはり木の上。
ユーラシアの大部分の地域で見かけられる。（左）
PH. LUNDIN-OSTMAN

テン，つややかな茶色の毛
これが春と秋になると換毛して
明るくなったり暗くなったりする。
のど元の大きな黄斑だけは
季節が変わってもそのままである。
PH. OKAPIA

テン属 *Martes*

テン属に分類されるイタチ科動物は，小型の肉食獣で，からだがほっそりとしなやかで，鼻先はとがっている。四肢（しし）は短く，足先の5本の指には鋭いかぎづめがついている。肛門腺（こうもんせん）からは，じゃこうのような液体を分泌（ぶんぴ）する。毛皮は珍重されている。いくつかの種があるが，以下，テン，クロテン，ムナジロテンと，順を追って調べてみよう。

テン *Martes martes*

テン（マツテンともいう）は体長約50センチ，尾長は25センチである。柔らかな毛並みは，色の淡い密生した下毛と，色の濃い上毛とからなっている。黄色またはオレンジ色のまだらが，胸もとにひろがっているが，前肢（ぜんし）にまでは達していない。全体の色調は，冬にはいっそう濃くなる。雌は雄より色が明るく，胸のまだらがあまりはっきりしていない。

テンはヨーロッパの大部分，アジア北部および中央アジアに分布している。一般に日陰の多い松柏（しょうはく）類〔裸子植物の一群でマツ科，スギ科，ヒノキ科の総称〕の密林にすみ，人のすんでいる地域をきらう。

樹上で生活し，木のほらあるいは他の動物が捨てた巣穴をすみかとしている。昼間はこの巣穴に休んでいて，夜になると獲物を捜しに出ていく。

テンは，自分のなわ張りにしるしをつけることに，きわめて熱心である。芳香性の分泌（ぶんぴ）物をごくわずかにぬりつけるだけなのだが，このかおりは快い。テンはしるしをつけようと思うところを，尻で静かにこする。この姿勢はきわめて独特なもので，これを排泄のときの姿勢と混同してはならない。ごく短い間立ちどまってしるしをつけると，テンはまた，なわ張りの巡回を続ける。いくつか選んだ場所（地面の小さな隆起，石，木の幹や枝）を順ぐりに立ち寄って，そのたびに新しくしるしをつける。発情期には，その場所をふやし，なわ張りのしるしをつける場所が150以上に達することもあり，そこを見まわるには毎日何時間もかかるほどだ。

足は柔らかい毛におおわれているから，その足跡をつけていくのはむずかしい。またよく木々のあいだを，枝から枝へと渡るので，足



跡を見失ってしまう。とても用心深い動物で、何度も回り道をしてからでなければ、巣穴へはもどらない。

もともと樹上生活者であるテンがえさにしているのは、とくにリス、鳥類、および樹上にすむその他の小さな齧歯（げっし）類で、これらの動物ののどをひとかみで食いちぎる。テンが松柏（しょうはく）類の林を好むのは、その実をえさにしているリスが、多くいるからである。ウサギが巣穴で眠っているところを襲って、つかまえることもある。この場合には、4本の足で獲物を押えて、うなじにきばをたてる。そのほか、養蜂場に侵入して蜂蜜をなめたり、また、くだもの、とくにナシ、サクランボ、プラムを食べたりもする。

大量殺戮というやり口は、イタチ科の多くの動物に共通している。これは空腹とは関係がない。テンは、目についた獲物は全部殺してしまわないでは、気がすまないのである。

獲物が少なくなると、人家に近づき、ウサギ小屋やニワトリ小屋に侵入して、ひどい損害を与える。テンは家畜小屋の動物たちを皆殺しにした後、吸った血に酔いしれたかのように、累々たる屍のなかで眠るのだとむかしからいわれている。しかし実際には、へとへとに疲れて、獲物を運んでいく気力もなくなって、眠りこけてしまうのだと考えたほうがよい。

発情期は夏である。雄と雌とは、その季節になると、夜、夢中になって、休みなく戯れあう。雄たちは、1頭の雌を求めて争う。受精卵の着床がおくれるために、妊娠（にんしん）期間は270日から285日と長期にわたるが、これはイタチ科では平均的な数字である。

春に出産し、1産1、2子である。子どもは小鳥の巣穴にコケを敷きつめたところや、木のほらに生みおとされる。この季節には獲物が多く、捕えやすいので、子どもを育てやすいからである。テンの子は、あらゆる点でムナジロテンの子に似ていて、生まれたばかりのときには区別がつかない。生まれたときには、目は閉じていて、歯はなく、柔らかい毛に包

テン　イタチ科
ふだんは、木のほらなどにひそんでいるが
夜になるとそこからあらわれ
鳥類、リス、くだものをあさっている
体長は約50センチ、尾長は25センチほど
PH. FATRAS

テン。木のほらから頭をのぞかせ
好奇心にあふれた顔をしている
からだは小さいが、実は恐るべき大量殺戮者
ニワトリ小屋にはいると、手当たりしだいに殺して
満足のあまり、その場で眠りこむとか（右）
PH. FATRAS - VIRON





テンの毛皮は，冬になるといくらか明るくなるが，イタチ属のオコジョなどのように，雪と同じ白色に変わるわけではない。しかし，敵の目をごまかす方法を知っていて，雪の上の同じ足跡を何匹もで踏み，ときどき横へとんでは足跡を消して，猟師の目をくらます。いま，知恵くらべに勝ったのだろうか，顔を上げて得意げなようすである。

PH. L. VAN WORMER







まれた皮膚はすけて見える。

母親は，注意深く子を育てる。数週間たつと，子は母親について出かけられるようになる。母親は子どもたちにいろいろなことを教え，また敵に襲われたときなどには勇敢に立ち向かって子どもたちを守る。

テンはむかしから，狩りの獲物としてねらわれ，またわなで捕えられてきた。それは柔らかくじょうぶな毛皮が，珍重されていたためでもあるが，また，ニワトリ小屋に損害を与えたことが原因でもある。ごく幼いときにつかまえれば，よく人になれ，ミルクにひたしたパンで育つが，成獣になると本能が首をもたげて，小型の動物が手の届くところを通ると，なんでも殺してしまう。ときには，自分の子どもさえも殺してしまうことがある。

北アメリカには別種のテン *Martes pennanti* がいて，フィッシャーテン，ペナントテン，あるいはペカンなどと呼ばれている。この動物は臆病で，アメリカの森林が開拓されたときにはほとんど絶滅しかけたが，今ではまたその数がふえてきている。

キエリテン *Martes flavigula* は，また別の種で，のど元は黄色い。



ムナジロテン（ブナテン），イタチ科。のどから胸へと大きくひろがった白い斑模様が その名の由来。勇敢で，動きはすばやい。ヒマラヤ以北のアジアとヨーロッパのほぼ全域に分布。体長約45センチ，尾長は20センチ余り。（左）
PH. A. FATRAS

テンの子ども。イタチ科。生後6週間で離乳し かたいものを食べ始める。また母親とでかけて 狩りの方法を教わるのも，このころからである。枯れ草にからだをうずめて，目で追うものは 母の姿か，はたまた獲物のけはいか。（上）
PH. J. SIMON PHOTO RESEARCHERS

テン。見かけの愛らしさにもかかわらず この動物の性質はかなり残虐だ。いったん殺し始めると，やむところを知らない。写真は，茂みにひそんで鳥をつかまえ 首をねじ折ったところである。（下）
PH. G. QUEDENS



クロテン　*Martes zibellina*

クロテンは、同じ属のテンにくらべると、もっとずんぐりと太っている。体長は40センチを越えることはなく、尾長は20センチほどである。頭部はきわめて特徴のある円錐形をしている。あごの部分はテンよりも幅広く、がっしりしている。前頭部とこめかみの毛は非常に長く、耳のつけ根をおおっている。ほおと下あごの毛も長く、ことさらに頭を円錐形に見せている。耳はかなり大きくて、先がとがっている。

そのほかテンと違うところは、クロテンの足のほうがよりがんじょうで長く、足うらもより大きく、毛が多いことである。またクロテンは、テンほど活発ではない。

世界最高の毛皮の持ち主

クロテンは、世界でもっとも美しい毛皮をしていることで有名である。この毛皮は濃く密生し、しなやかである。単一な黒い色調が、上品な青みがかった下毛の上に浮きあがって見える。この上毛と下毛とのつりあいは、毛皮商人からは《水の光沢》と呼ばれている。

もっとも珍重されるものは、上毛と下毛の色のつりあいがよく、上毛の色に冴えがあって、背中はほとんど黒、ほおは灰色、首とわき腹では暗いくり色、首の根もとが美しい卵黄色になっているものである。

この独特な毛色にも、かなりの個体差があって、色の薄いクロテン、ときにはほとんど白色に近いクロテンを見ることもある。

クロテンは今では、東部シベリアのタイガ〔針葉樹林帯〕や、カムチャッカの森林と中国東北部にすんでいる。また北海道には、エゾテン *Martes zibellina brachyura* と呼ばれる亜種がいる。

中世には、北はスカンジナビア半島までのヨーロッパに生息していたが、乱獲されたため、西ヨーロッパからは完全に姿を消してしまった。17世紀には、1年間に50万頭のクロテンが殺されたと推定されている。ラップ人〔スカンジナビア半島北部と、ソ連のコラ半島に住む民族〕などは、かつては、クロテンの毛皮で税金を払っていたくらいである。

クロテンは夜行性の動物で、常食にしているシベリアの齧歯（げっし）類、とくにリスの一種や野ネズミのあとを追って定期的に移動している。

木登りがじょうずで、昼間は針葉樹の上で過ごし、獲物をとるのはおもに夜である。しかしときには日中に狩りをして、食べあきた後、休んでいることもある。この動物は足が速いうえに忍耐強く、またずるがしこいから狩りをするのにイヌを使っても、つかまえることはきわめてむずかしい。ことに山地でのクロテン狩りはむずかしいが、それは岩陰に、いくらでも隠れ場があるからだ。

クロテンは、木登りがじょうずだから地上の齧歯類のほかに鳥やその卵を食べ、また泳げるので、魚をとって食べることもある。また野生のミツバチの蜜や、くだものも、たいへん好んで食べる。

テンと同じようにクロテンも、受精した卵子の着床に時間がかかるので、妊娠（にんしん）期間は長く、しかも一定せず、260日から290日にわたっている。子は春のはじめに、1腹に3～5匹が生まれる。

毛皮は冬がもっとも美しくなるから、クロテン狩りは、むかしは10月に始まって11月末か12月はじめに終わるものであった。この狩りは、積雪と寒さのために骨がおれるので、おもにわなを利用していた。バイカル山地南端の高地では、狩りは9月の末に始まる。この地域では、クロテンがずっと早くから冬毛に変わっているからである。〔注1〕

分類学上では、クロテンにはエゾテンをふくめて、5亜種しか知られていないが、色調によって分ける毛皮には17の種類がある。いちばん珍重されるのは、シベリア南部、ヤクーツク、オホーツクでとれる毛皮である。エニセイ、レナ、アムールの各川の流域でとれる毛皮は、値うちが少し下がる。

ソ連では、クロテンの人工飼育を始めているが、生きたままのクロテンを売ることはしていない。それをもとにして、外国で飼育を始められるのを恐れてのことであろう。

ムナジロテン　*Martes foina*

ムナジロテン〔イシテンともいう〕は、テンにかなりよく似ているが、少し小型である。成長した雄でも全長70センチを越えることはなく、その3分の1は尾である。テンにくらべて、足は短く、耳も小さい。毛は短いうえに、色調が明るく、テンほどこまやかではない。胸もとのまだらは、テンでは黄色またはオレンジ色だが、ムナジロテンではその名のとおり、白色で、前足の内側までひろがっている。

下毛は白っぽく、上毛は暗い褐色で、全体の色調は独特な灰色がかった色になり、尾と

クロテン。イタチ科。
世界で、もっとも美しい毛皮をもつ動物。
夜行性で、木登りはお手のもの。
体長約40センチ、尾長は20センチほどである。
シベリアから中国東北部にかけて生息している。
PH. APN

足では色が濃い。耳のふちは，クロテンと同じように，白っぽい毛に包まれている。

ムナジロテンは，東はモンゴル，中国東北部にいたるヒマラヤ以北のアジアに，西はほぼ全ヨーロッパに分布している。ただし，ヨーロッパでも，スカンジナビア半島最北部と，いくつかの島にはいない。すなわちクレタ島，ロードス島にはいるが，アイルランド，サルジニア，コルシカ，シチリアなどにはいない。

フランス名フイーヌ（Fouine）は，古いことばでブナという意味のフー（fou）からきているが，実際にはブナの森にひそんでいるわけではない。アルプス山中では夏の間に，松柏（しょうはく）類の茂る最高限界線を越えて姿を見せることもあるが，ふつう平野の耕地に好んですみ，人家の近くに巣をつくる。

穀物倉，屋根裏の納屋，うまや，空家，薪束を積んだ中などが，とりわけお気に入りの場所である。というのは，それらの場所は，食糧のおもな供給源となる家畜飼育場に近いからである。森では，おおむね木のほらに身をひそめているのだが，穀物倉では仕切り壁のそばの，まぐさやわらのなかに隠れ，じゃまなものは歯で食い破って，それこそりっぱな巣をこしらえてしまう。

ムナジロテンは跳びはねて進み，土地のやわらかいところでは，はっきり見分けられる足跡を残す。前足の跡のほうがあと足の跡よりも，ずっとはっきり残る。四肢（しし）には５本の指があるが，足跡は４本しか残らない。親指はまったく跡を残さないのである。

殺すために殺す

木登りがうまく，どんなになめらかな幹でもよじ登るし，泳ぎも達者である。どんなに小さな穴でも，どんなに狭い裂けめでも，もぐりこむ術を心得ている。冬は日中を巣穴で眠って過ごし，夜にならなければ出てこない





ムナジロテン。イタチ科。
胸の下の前足に，鋭いつめがのぞいている。
このつめは，木登りや，獲物をしとめるときに
その威力を発揮する。
写真では４本に見える前足の指は，実は５本。（下）
PH. G. QUEDENS

ムナジロテン。
活発で，キビキビとした活動家だ。
森のなかにすみ，リスや小鳥，ヘビ
トカゲなどを獲物にしている。（上）
PH. E. VOLLMAR・A. L. I

が、夏は夜間から獲物を捜しに出かける。

すばしこくて勇敢なので、信じられないほどの大胆さを発揮して略奪し、獲物を手に入れるためには、屋根がわらをはがすほどのことをやってのける。テンと同じように、食べきれないほどたくさんの家禽などを殺す。犠牲となった動物の血をなめ、1羽だけは持ち帰って食べるといわれている。しかし、食べあきて疲れきったムナジロテンが、殺した動物たちの屍のなかとか、ハト小屋やニワトリ小屋の屋根の上で眠りこんでしまっていることが、ときおりある。

ムナジロテンはまた、ネズミ、ウサギなどの齧歯（げっし）類、多種多様な鳥類も殺す。卵が好きで、穴をあけて中身をのみこむ。森では、リス、爬虫（はちゅう）類、両生類などをつかまえる。また蜜や果実も好きである。

夏の発情期には強い臭気をまき散らし、きわめて独特な叫び声を出す。テンと交尾して、非常にじょうぶで長生きする雑種をつくることもある。

テンと同じように、受精卵の子宮粘膜（ねんまく）への着床が遅れるために、妊娠（にんしん）期間は250日から295日と、長期にわたっている。子が生まれるのは春のはじめの、3月末から4月はじめにかけてで、1産3～5子である。この季節はハツカネズミの子が生まれ、野鳥のひなも卵からかえるなど、ムナジロテンの獲物が豊富なので子どもを育てやすい。

生まれたばかりの子は、歯もなく、目も閉じたままで、うぶ毛に包まれているが、その下にバラ色のはだがすけて見える。うぶ毛には、すでに胸もとのまだらがはっきりとあらわれている。40日ばかりたつと、子はふつうの食べ物をとり始める。めんどうをみるのは母親だけで、獲物のとり方などもじっくりと教える。また母親は、岩や小壁、木の幹など、さまざまな障害物を乗り越えさせる。そうやっているうちに子どもたちは、必要な敏捷さを身につけるのである。

母親は、とらわれの身の状態でも、子どもがいっしょであればその子の世話をよくみる。また、母親がいなくなった子どもは、子を生んだばかりのネコに育てさせることができる。ムナジロテンの子はよく人になれ、子ネコのようになつく。成長してからつかまえても、ある程度までならすことができる。古代のローマ人はこれを飼いならして、ネズミ退治に使った。

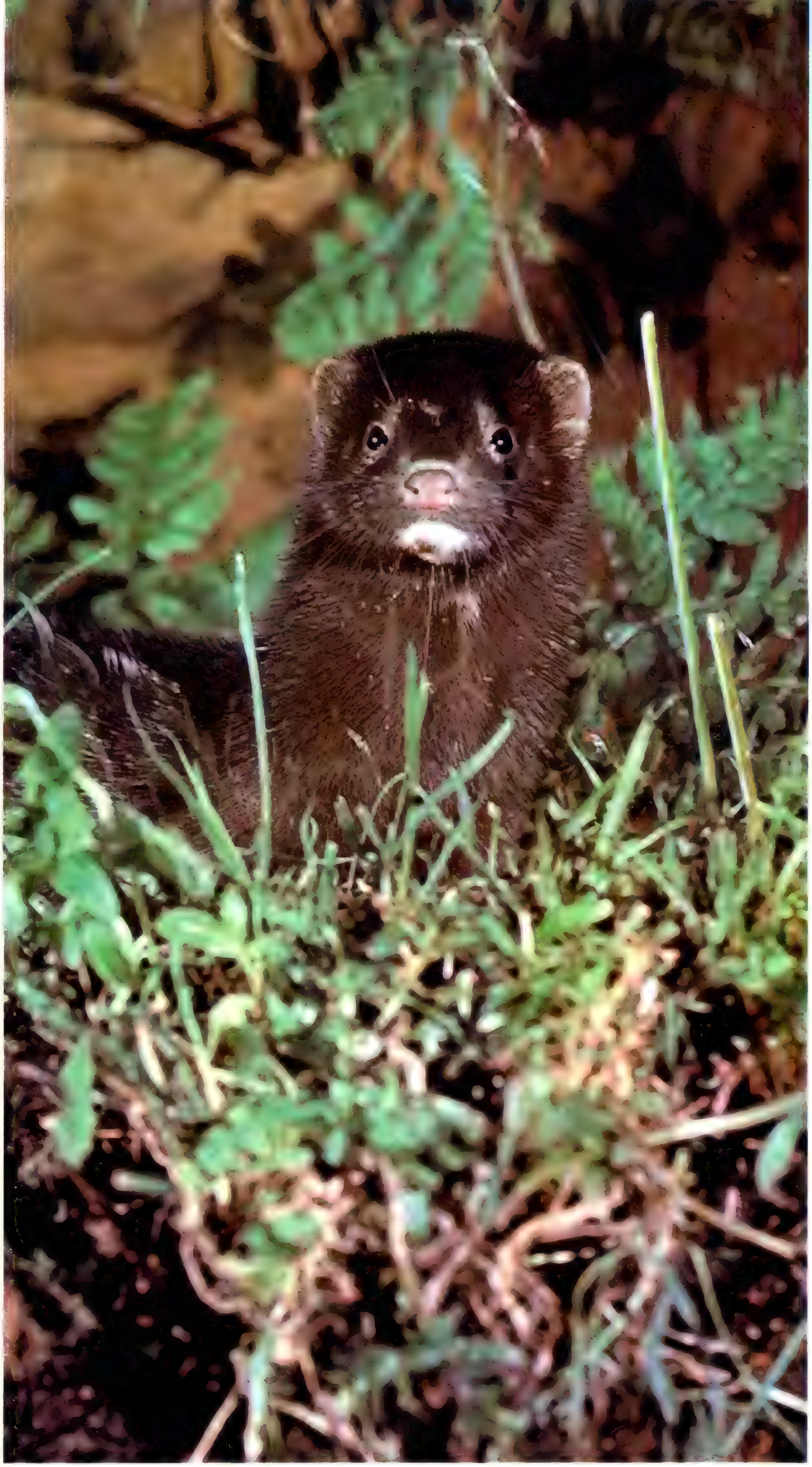
かつてスコットランドのいなかで、長い間被害を与えていた1匹のムナジロテンが、けがをして捕えられたことがある。猟師の家に





ムナジロテン。イタチ科。光に輝く体毛が美しい
柔らかく密生した下毛の上に
弾力性のある上毛が重なる
イタチ科でも、テン属とイタチ属の動物の毛皮は
人間の垂涎の的である

PH A FATRAS



25−18

[illegible] *Mustela vison*の２種がある

[illegible]の装飾品やコー[illegible]には

[illegible]飼育されている種類が利用される

PH. [illegible] BERTON PHOTO RESEARCHERS

連れていかれて世話を受けると，まもなくなれてきたので，主人はこれを使って，ウマ小屋に横行するネズミどもを退治させることにした。このムナジロテンは，すぐにウマが大いに気に入って，そのうちの１頭と仲良くなりさえした。いつもそのウマのそばで眠り，背にとび乗ったり，周囲をはねまわったり，尾や耳をくすぐったりしては，遊んでいたのである。残念なことにこのムナジロテンは，夜の散歩の途中でわなにかかり，見つかったときには死んでいた。

ムナジロテンを狩るのは，かなりむずかしい。この動物は，警戒心が強いからである。しかしその毛は今日でも，つむいでネクタイをつくるのに珍重されている。

イタチ属　*Mustela*

イタチ属は，体型が小さく，歯を見るとテンよりもいっそう肉食性が強いことがわかる。からだは非常に細長く，体高は低い。

イタチ属は，３つに分類できる。第１に，カワウソによく似た性質をもつミンク，第２に，腹よりも背の色が濃いイイズナとオコジョ，第３に，腹のほうが背よりも色が濃いケナガイタチとフェレットである。

ヨーロッパミンク
Mustela lutreola

ヨーロッパミンクは，短い尾をふくめて全長約40センチほどである。カワウソのように半水生で，後肢（こうし）には水かきがある。なめらかで光沢のある毛は，背のほうでは濃い褐色で，腹はそれより淡い色をしている。のど元に明るい色の斑紋がある。あごと上くちびるは白っぽい。

かつてはヨーロッパ北部全域と，西部シベリアにまで広く分布していたが，開発された地域から追われて，今ではきわめて少なくなってしまった。これは，毛皮をとろうとして人間が狩ったためでもあるが，それ以上に生息に適した自然のままの土地が，少なくなったためである。

非常に数が少なくなってしまったために，その習性はあまり知られていないが，アシのはえている湖や川の岸べの，木のたくさんはえたところにすんでいることはわかっている。巣穴はハンノキ（湿りけのある林などに自生する針葉樹）などの根のあいだをぬって掘られており，この巣穴には，いくつもの出口が



ある。そのそれぞれの出口は，すべて水中に開いている。

ミンクはカワウソと違って，敵から襲われた場合の逃げ道となる地上への非常口は，つくってはおかない。少しでも危険を感じると水にもぐり，長い間水中にいて，姿を消した地点からずっと離れたところに，ふいと浮かびあがる。泳ぎはうまいが，川の流れにさからえるほど力強くはないので大きな流れは避ける。地上では速く走れないし，木に登ることもできないが，しなやかですばしこく，どんな狭いすきまにも，驚くほどうまくもぐりこんでしまうことができる。

食物はおもに，魚，カエル，ザリガニ，カタツムリ，小鳥とくに水鳥である。発情期は2月から3月にかけてである。子は2か月後に，3匹ないし4匹が，川から遠くない乾燥した場所に掘られた巣穴で生まれる。生まれたとき，目はまだ開いていない。

今日ではもうヨーロッパミンクの毛皮は，毛皮業界では使われていない。ヨーロッパで養殖されているミンクは，みなアメリカミンクである。

ごく若いうちに捕えると，飼育生活に非常によくなれ，人にもなつく。イタチ属の他の動物よりもおとなしく，わざとおこらせでもしないかぎり腹をたてることはない。昼間はいつも干し草の山の上で，丸くなって居眠りをして過ごしている。

生まれついての自由奔放な気持に動かされて，夜になるとこっそりと抜けだすことがあるが，日の出とともに自分から，飼い主の家にもどってくる。

この種は，野生で生息し，絶滅が心配されている。胸もとは白くない。あごの下の白い斑紋が特徴。水中で生活することが多いため，あと足の指には水かきがある。

PHIL BURTON PHOTO RESEARCHERS



ヨーロッパミンク。イタチ科。
水中生活者の常として
川や湖のそばに巣穴を掘ってすむ。
カエル、ザリガニ、水鳥をとって食べている。
1産3、4子。体長25センチ、尾長15センチほど。
PHIL BURTON PHOTO RESEARCHERS

25 - 20

日本のイタチ科動物 4

テン属の仲間たち

犬飼哲夫

日本には，テン属の動物が2種1亜種いる。北海道にすむエゾテン，本州，四国，九州のホンドテン，そして対馬にいるツシマテンである。

エゾテン
Martes zibellina brachyura

シベリアにいるクロテンの一亜種である。体毛は，クロテンのような美しい淡黒色のものは少なく，ほとんどが淡黄褐色をしている。

体長は35～45センチ，尾長は12センチほどで，ふだんは単独で生活し，6,7月に交尾すると，253～297日後（翌年の4,5月）に2～4子を出産する。

北海道の山岳地帯の森林にすみ，ときおり木に登っては，エゾライチョウなどの野鳥を襲い，エゾリス，モモンガを食べることもある。野ネズミやノウサギが大好物で，冬の積雪期になると，雪の上のノウサギの足跡を根気よく追跡してつかまえる。このほか，昆虫やカエルなど，またヤマブドウやコリアの実も食べている。

巣は木のほらや枝葉の茂ったところ，あるいは岩穴につくり，日中はほとんど姿を見せず，夜に活動する。生息地は，人里遠い場所なので，人目にふれることはもちろん少ない。現在では，中央山系や日高山脈に多くすんでいる。

むかし，まだ北海道の開発がすすんでいない時代には，全道一帯に広く分布していたものであるが，南部から着手された開拓の伸展とともに，北方の奥地に駆逐されてしまった。

世界最高級の毛皮

ところで，このエゾテンの後退と，本州のイタチの進出北上とが平行して起きたため，当時の開拓者は，イタチのいない国はテン道楽〔テンの天下だという意味〕といっていた。

この動物の毛質は，クロテンとまったく変わらず，良質のすばらしい短毛である。

その手ざわりをくらべれば，ミンクの毛皮がざらざらと，あらく感じるほど，エゾテンの毛皮はなめらかで，きめが細かい。

明治時代にはエゾテンが，北海道の名産物の1つとして，海外にも輸出されていたくらいである。しかし，大正期にはいってからは，乱獲が原因で激減し，絶滅にひんするようになった。そこで，1920（大正9）年に禁猟指定獣として保護され，現在にいたっている。

最近では，生存数はやや増加の傾向がみられるが，高値で取引きされる毛皮をねらう密猟者が跡を絶たない。

かれらのやり方は，山奥でノウサギやライチョウをとると，わなを仕掛け，テンの足跡が見られる所に，これらの動物の血を落とし，わなに誘導するのである。



冬のホンドテンは，夏とは逆に，濃い体色に変わる　鳥取・大山にて　撮影　岩合徳光　1970年12月

ホンドテン
Martes melampus

元来，日本固有の動物で，本州，四国，九州に分布している。

ホンドテンは，エゾテンやイタチよりも大きく，体長45～50センチ，尾は25センチ前後である。身が軽く，森林の老木などのほら穴や山地の岩穴などにすむ。各種の野鳥や卵を食べ，ネズミ，ヘビ，カエルなども襲う。とくにノウサギは大好物である。

冬になると人里近くにあらわれ，人家にひそむネズミを捕えることがあり，そのほか，柿の木に登って柿を食べるともいう。山ではマタタビ，ヤマブドウを食べている。

交尾期は，2,3月で7週間の妊娠期間のあと，4,5月に1,2子を出産する。

毛皮は下毛で区別する

このホンドテンの毛色は，濃淡のある黄褐色が多く，やや黒みがかったものを，毛皮界ではスステンと呼んでいる。また，分類の方法としては，毛皮を息で吹きわけ，下からあらわれる下毛（綿毛）の色で区別するものがある。

下毛の色の白みがかったものを根白（ねじろ）といい，淡青色のものは根青，また，根赤といえば下毛の赤みがかったものをさす。しかしこの区別は，毛皮の商取引上の区分で，その年によって，流行が変わるため価格も一定していない。

ホンドテンの毛皮の上毛は，クロテンにくらべて，長く，かたいから手ざわりも悪く，毛質は劣るが，決して下級品ではない。

最近のわが国におけるテンの毛皮の生産は，毎年7000～8000枚である。四国，九州の暖かい地方に産するものよりは，東北地方の毛皮のほうが質がよい。

この動物は大陸系のエゾテンと違って，本来，北海道には分布していなかったのだが，第二次大戦前に，毛皮獣として飼育しようとした者によって，北海道にはいっている。その後，戦争により，飼料の入手困難や人手不足も手伝ってか，野外に放たれたり飼育場を逃げだすことによって，野生にもどった子孫が自然にふえた。今では札幌付近から倶知安（くっちゃん）方面の山岳地に生息しているようだ。

むかし，東北地方では，この動物の夏毛の状態でいるときを雷獣と呼び，長野地方では，この肉を肺病の妙薬と信じていた。

ホンドテンは，夏が近づくと，やや白っぽい体毛になる　志賀高原にて　撮影　岩合徳光　1971年5月



ツシマテン
Martes melampus tsuensis

ホンドテンの亜種で長崎県の対馬に分布している。からだの大きさは，ホンドテンとほとんど同じである。ただ，頭の上部が白いため，ワタボウシとか，ワタボウシカブリとも呼ばれている。対馬の海岸の岩場にすみ，冬になるとツバキの林にあらわれ，その花の蜜をなめる。そのほかの習性は，ホンドテンと同じである。■

カラーページ注

〔注1〕 **動物の毛変わり**　人間の装飾や防寒に利用価値があるのは，哺乳動物の冬の毛皮である。夏の毛皮は夏毛といって，色彩は単調で，下毛が少ない。秋には上毛の色彩があざやかになり，下毛が多くなって冬毛に変わる。春になると冬毛は下毛の大部分が抜けおちて，また夏毛に変わる。これを換毛とか，毛変わりという。■　（犬飼哲夫）

“渇き”への抵抗

夏と動物〈上〉

宍戸弘明



砂漠の地平線に日が落ちて、ラクダたちにもようやく、いこいのときが訪れる（サウジアラビアにて） 撮影 朝日新聞出版写真部

海洋の漂流記や砂漠の横断記を読むと，〝水〟の欠乏との戦いが，いかに悲惨なものかがわかる。こうした記録を読むまでもなく，わたしたちの日常の生活でも，暑いさかりの汗まみれになったときに飲む冷たい水の味は，格別なもので，生命がよみがえるような感じすら覚え，水のありがたさを身をもって知るのである。ほとんど無味無臭で，栄養分をふくまない水が，どうしてこのような感覚を人にもたらすのだろうか。水は動物にとって，どのような役割を果たしているのかを考えてみよう。

体内における水の効用

動物の種類，年齢や性別で，あるいは環境条件や栄養状態によっても違いはあるが，動物の体重の65～75パーセントは水で占められている。水はからだを構成する成分のなかで最大のものであるが，それだけの理由で，水は生命に欠かすことができないというのでなく，生理的にも重要な役割をもっている。

動物の生命を維持しているからだの内部環境は，すべて水溶液からなっている。血液，消化液，尿，汗や乳などは水溶液であり，また，栄養分の吸収，不必要な物質の排泄も，水があってはじめて行なわれる。からだの内部で行なわれる化学反応は，それぞれの物質が水に溶けて接触しあうことで行なわれ，味覚や臭覚も刺激物質が水にとけてはじめて起こる。また体液の浸透圧（溶液と溶媒間の圧力差）などの調節にも，水の果たす役割は大きい。つまり，水は動物に対して，生命現象を営むために必要な環境を提供しているといってもよい。

動物の体温調節のしくみについては，次週に詳説されるが，動物が高温にさらされたときに，体温の上昇を防ぐのに主要な働きをするのも，体表面からの水の蒸発である。蒸発の経路は皮膚，呼吸気道や汗で，蒸発するときの気化熱（1グラムの水で0.58キロカロリー）が，体熱の放散に利用される。つまり水なくしては，動物は暑さに耐えることはできないのである。

通常，動物の体内では，摂取する水と排泄される水の量はつり合っているが，大量の水分が失われ，水の補給が不足すると，脱水の危機に陥る。ヒトでは12～20パーセントの水を失うと，死にいたるといわれている。こうした脱水に対する抵抗力は動物により異なるが，一般に，高温で水の乏しい地帯にすむ動物ではきわめて強い。最高気温が40°Cにもなる放牧地で水を絶たれると，ウシは3，4日，ヒツジは6～8日で死亡するが，ラクダは12～15日も生き続ける。脱水に動物はどのように耐えていくのかを，砂漠にすむ動物でみてみよう。

ラクダによって，水の欠乏に耐える家畜を研究する　オーストラリアにて　撮影　筆者



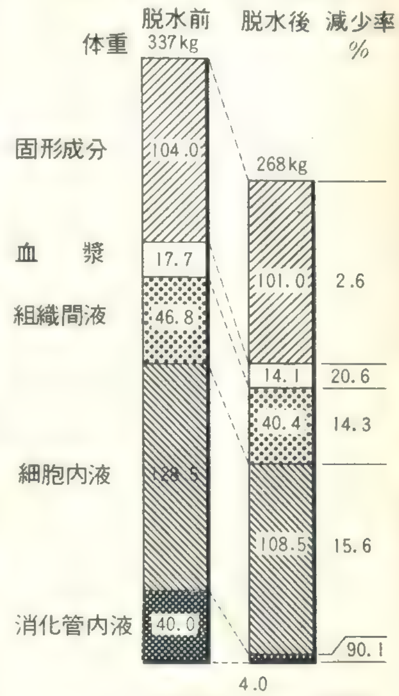
脱水に耐えるしくみ

日中の気温が40～45°Cにもなり，直射日光も強く，地表の温度が70°Cにも達する砂漠では，雨もほとんど降らないために，動物が利用できる水はほとんどない。そこで，そこにすむ小動物，ハタリス，カンガルーネズミやスナネズミなどは，地下50～100センチの深さの穴に身を隠し，きびしい自然を避けている。穴の中では，最高気温はせいぜい30°Cにすぎないから，体温の調節に水を利用する必要もなく，体内の水は大いに節約される。しかし，同じ砂漠にすむラクダは，穴にもぐることはできない。かれらは童謡で親しまれているロマンチックなイメージとうらはらに，苛酷な自然条件に耐えなければならないのだ。

ラクダは大きいコブ（体重の20パーセントにも達する）のなかに水をたくわえているから，水のない砂漠でも生きていけるという話がある。これは誤りで，コブには脂肪がたくわえられていて，水はたくわえられていない。ラクダは反芻動物で複胃をもっているが，水をたくわえるのは，この大きな胃腸の部分である。

体重400キログラムのラクダの胃腸には，60リットルもの水があるという。つまり，体重の15パーセントに当たる水が胃腸部分にあるが，ヒトではその量は7パーセント，イヌでは4～6パーセントにすぎないことを考えると，いかに多くの水が消化管にたくわえられているかがわかるだろう。ヒトに多量の水をむりに飲ませると，利尿作用を起こして，余分な水はすぐに尿としてからだの外に排泄されてしまうが，ラクダでは排泄はきわめてゆっくりとしか起こらない。つまり，〝飲みだめ〟の能力が大きいといえるわけで，砂漠でラクダの隊商は，出発前にむりにでも多量の水を飲ます習慣があるという。

〈図1〉ラクダの脱水による体の構成の変化
（平均最高気温41℃，9日間の絶水）



(by W. V. Macfarlane 1963年)

図1をみてみよう。ラクダを真夏に9日間絶水したときに，からだを構成する部分が，どれほど減少したかを示したものである。からだの固形部分（水分以外のからだの構成要素）にほとんど変化がないのに，もっとも大きく減少したのは消化管の水分で，失われた水分の50パーセント以上をまかなっている。ラクダは消化管の水を利用して絶水に対応し，からだの他の主要な部分への被害を，最小限に食い止めている。つまり，〝飲みだめ〟の効果は明らかで，ヒトやイヌではこのようなことはできない。

消費を防ぐからだの機能

貯蔵した水の利用ばかりでなく，からだの内には水を保つために，水の排泄をおさえる種々の機能が働く。ラクダの水分の排泄経路を他の動物と比較してみると，**表1**のようになる。ラクダの水分排泄の特徴は，尿や糞への排泄をおさえ，その分だけ体熱の放散に不可欠な，皮膚面からの蒸散が相対的に大きい点にある。ウシなどが多くの水を，尿や糞の形で体外に排泄してしまうのと比較すると，ラクダはいかに水を有効に利用して

いるかがわかる。

これらの点を，表2を参考にしながらさらに検討してみると，まず，尿量はきわめて少ない。動物のなかで，ヒツジも比較的脱水に強いが，同じ体重に換算すると，ラクダの尿量はヒツジの10分の1程度にすぎない。少ない尿で体内の不要なものを排泄するため，ヒトなどでは不可能なほどの濃縮された尿になる。これは腎臓の濃縮機能の差である。脱水時のラクダの糞はかたい塊糞で，水分も40パーセント以下と他の動物にみられない低さであり，ともに水を体内にとどめるのに役だっている。

水の排泄経路で大きいものは，体温調節に役だつ皮膚面からの水分蒸散であるが，ラクダはヒトと同じく，効率のよい汗を利用し，イヌやヒツジのように呼吸増加による方法にはたよらない。しかも，発汗量は，ヒトなどの値から考えられる量の半分にすぎない。もっとも，このふじゅうぶんな蒸散のために，熱はからだの内に蓄積されて，体温は1日のうちに5°Cも上昇してしまうが，この体内にたまった熱は，急激に冷えこむ砂漠の夜間に体外に放出されて，寒さに耐えるのである。このような体温の大幅な変動に耐えられる特性も，水の節約に寄与している。また，脱水が続いても，ラクダでは他の動物のような血液の濃縮がなかなか起こらず，からだの循環機能を保つうえでも好つごうである。血液や体液の浸透圧の上昇に耐える点でも，ラクダは抜群である。

体内でつくる水の利用

水は体外から摂取されるだけでなく，実は体内でもつくられるのである。栄養分が体内で燃焼した結果生ずる水（代謝水）がそれで，栄養素によって代謝水の量は異なる。1グラムの脂肪から1.07グラムの水，つまり，脂肪からはほぼ同じ量の代謝水が生ずる。代謝水という意味では，ラクダのコブのなかに水がはいっているというのも，まちがいでないといえるかも知れない。しかし，最近の研究では，ラクダのような大きな動物が高温，乾燥した砂漠で脂肪を燃やすと，必要な酸素の取り入れが増すにつれ，呼吸が増加し，余分に水分が蒸散するので，結果としてマイナスになるという。一方，砂漠の地下にもぐるカンガルーネズミのような小さな動物は，蒸散する水の量が少ないため，必要な水を代謝水でほぼ充足している。

<表1> 高温環境下での体水分の排泄経路と動物による差

排泄経路＼動物	呼吸気道	皮膚（汗を含む）	尿	糞
ヒト・ウマ	±	＋＋＋＋	＋＋	＋＋
ラクダ	±	＋＋＋	＋	＋
ウシ	＋＋	＋＋＋	＋＋＋	＋＋＋
ヒツジ	＋＋＋＋	＋	＋＋	＋＋

（＋印の多いほど相対的に排泄量が大きい。±印は排泄量が少ないことを示す）

<表2> 動物による脱水時の反応の相違

動物＼反応	ラクダ	ヒツジ	ウシ
生存日数（日）	12～15	6～8	3～4
1日あたりの体重の減少率（％）	2.0	4.5	7.0
血漿からの水分の減少率（％）	4.5	8.0	10.0
尿の最大濃縮度（osmol／ℓ）	3.8	3.1	2.6
糞中の最少水分量(％)	38	45	60

（平均気温40℃の砂漠での成績）

生命に結びつく水

このように，ラクダは体内に水分を保持する力が強く，水の排泄を極度におさえ，水の体内での利用効率を高めながら，一方では脱水に伴う，さまざまな体内の変化に耐える力をもっている。しかし，こうした特性は，他の動物でも水の欠乏に耐える個体には，程度の差はあってもみられるので，水と動物の関係を指標にして，品種改良を進め，不毛の砂漠へ家畜を導入しようと真剣に試みている科学者もいる。

ヒトは発汗などで多量の水を失うと，体液の浸透圧や容積に変化が生じ，喉の渇きを感じて水を飲もうとするが，脱水が続くと，水によってもたらされているからだの内部環境が，しだいにくずれていく。水の損失はたんにからだの他の組成に対する割合が減るということだけでなく，生理的には生体の内部環境にゆがみが，極論すると生命にゆがみが生じることである。したがって，水を飲むことによって命がよみがえるように感じるのは，生理学的にいっても，けだし当然といえるだろう。■

（農林省畜産試験場場員）

鳥獣むかしばなし 3

蚕の始まり

再話　稲田和子　　え　赤羽末吉



なんと昔があったそうな。

むかしむかし，あるところにのう，立派な家があって，きれいなおじょうさんがおられたと。そして馬屋には1匹の馬を飼っておったが，おじょうさんはその馬を，それはそれはかわいがっておった。まい日まい日馬屋へ餌をのそけては，人にものを言うように話しかけておったと。馬も男馬じゃったためかしらん，が，おじょうさんをすっかり好いてしまったとみえる。

ある日，木戸をはね出て，おじょうさんの居間へとびこんで来た。

「さあ，こりゃあおおごとができた」

というので，男衆や女子衆は大さわぎをする。旦那さんに走って行って知らせるしすると，旦那さんは刀をさげて駆けつけるが早いか，「この無礼者めが」と，すぐさま馬の首をはねてしまった。

それから皮だけはいで，からだは土の中にいけてしまったと。皮はなにかの役に立つだろうけ，というので，川へ持って行って，石をのせて，流れる水にさらしておいた。

ところがおじょうさんにしてみれば，馬がなんともかんともあわれでたまらん。

「畜生とはいいながら，わたしとはあれほど話を重ねて，心が通いおうた仲なのに，お父さんはひどいことをしたもんだ」

と歎いて，川ばたへ出かけては，

「まあ，お前はむごい目に会うたのう。かわいいことだったのう」

と言うてばかりおった。

ある日もいつものように皮のそばへ来て，思わず泣いておったら，なんとまあ，あろうことか，馬の皮が，まるで生あるもののように，ぶるぶるっと舞い上がってきて，おじょうさんにまといつき，からだを包みこんだものだから，おじょうさんは息が絶えてしまった。

「ほんとになんの因果で，娘は馬やなんかと惚れあったもんかのう」

旦那さんや奥さんは，恥ずかしくもあり，腹も立てておったが，ばあやだけは，まい日お線香を持って，おじょうさんの墓に参って，

「やあれ，かわいや，いとおしや，おじょうさん」

と拝んでおった。拝み続けてある日ふと見ると，小さい木が墓の上に生えてきたそうな。「これはおじょうさんの魂にちがいない。粗末にはならんで」

ばあやは風よけをしたり，水をかけたりしてかわいがりょうたら，やがてそれが大きな木になって，ええ葉が出てきたと。

「ああ，これがおじょうさんのお姿じゃ」

と，なおも参っておると，黒い小さい虫が，その木の葉にたかっているのが見つかった。やがて，虫は木の葉を食いつくして，大きな白い虫になったそうな。よく見ればふしぎなことに，虫の頭はどれもこれも馬の頭の形をしているんじゃと。

「うちのおじょうさんは，えらいことになりなさったなあ」

と言うておったら，日がたつにつれて，その白い虫はからだがすきとおってきて，きれいな巣をつくったそうな。それをばあやが取ってみると，大きなざるにいっぱいあったんで，家へ持ってもどって奥さんに見せたんじゃ。

「なんと，おじょうさんのお墓から，こういう木が生えて，これこれの虫がわきましたが，その虫がこがな巣をこしらえました。こんな姿になられて，ほんにいとおしや」

「そりゃあ，おおかたなんぞになろうけ，たいてみよう」

奥さんがそう言われるので，灰汁をこしらえて，それをたいて引っ張りあげて糸をとり，光るような布を織った。それでうちかけを縫うたと。

うちかけは，おじょうさんの供養じゃと言うてお寺さんに供えたが，それが蚕の始まりじゃそうな。

昔こっぷり，どじょうの目。■

（岡山地方のはなし）

海中動物の生活（最終回）

写真と文　館石　昭

8　海底の掃除屋

ハタの口のまわりを掃除しているホソソメワケベラ　水深18メートル　ヘロン島にて



スキンダイビングをやっている人ばかりでなく，魚に少しでも興味があって水族館を訪れるような人は，ほとんどの魚がゆっくりと泳いでいるなかを，まるでフラダンスでもしているかのように，独特な尾の動かし方で魚から魚へと，文字どおり右往左往している小魚に目が止まると思う。

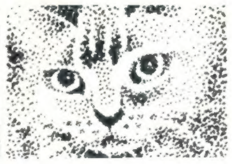
細長いからだに白と黒と青の大胆な縦縞（魚に関するかぎり空気中とは縦横が反対である。これはむかし魚類学者が，魚の頭を持ってつるした状態で，模様が縦に見えたのでタテジマ……というように名をつけたことに由来しているらしい）があって目だちやすいうえに，泳ぎが変わっているので，広い海底でもすぐに見つけることができる。体長５～10センチで，日本の海底はもちろん，赤道を越えて遠くオーストラリアの海底にまで広く生息しており，海の掃除屋として知られている。これがホソソメワケベラである。

人間でものみこまれるのではないかと不安に思うような２メートルを越える大ハタにも平気で近寄り，からだにまつわりつくように泳いでいる。ハタは決してホソソメワケベラをいやがったり追っ払ったりはせず，むしろ背びれを立てたり，えらをひろげたり，ときには大きな口をあけたままでいる。ハタのからだの表面についている小さなごみのような小動物を，丹念に捜しては食べてくれるホソソメワケベラは，ハタにとってはありがたい存在で，かれらが働いている間はじっと動かず気持よさそうにしている。アクアラングの空気が消耗するのも忘れて見ていると，たまにハタが口を閉じてしまうことがあり，のみこまれたかな……と心配するのだが，しばらくするとえらから出てきて，なにごともなかったかのようにまたからだをつついている。

体長30センチくらいのうちわのような形のツバメウオが，海底に落ちて死んだように動かないでいるのを，ヘロン島の海底で見かけた。近寄ってよく見ると，ホソソメワケベラが掃除に懸命になっているのである。ツバメウオに限らず，掃除をされる魚は，掃除が終わるまで動かずにいなければならないらしく，ハタのように海底にどっかとすわった格好の魚は平気だが，ツバメウオのように不安定な形の魚は，掃除が長引くと海底に横倒しになってしまうようだ。■

（水中写真家）

ペット相談室



担当

前川博司

（動物愛護協会附属動物病院院長）

〈問〉　まっ白いネコを飼っていますが，目が青色です。親ネコの目は黄色です。こんな目のネコははじめてですが，何か病気でしょうか。

（姫路市・平柴君代・28歳・主婦）

〈答〉　動物の目の色というのは，瞳（ひとみ）の周囲にある薄いまるい虹彩（こうさい）という膜の色のことをいいます。ネコでは茶，黄，緑，青を主な色として，それぞれに濃淡，明暗が少しずつあって，多彩な色をしています。ニホンネコには茶，黄が多く，緑色もあり，また白ネコには青色がわりあい多くいます。

金目，銀目といいますが，金は黄色，銀は薄い青色の目のことで，金，銀の片ちんばの目のネコもいます。虹彩の色は，それぞれ単一色ではなく，おもな色と，それに近い色が粒子状に集まり，虹彩の周辺部とか瞳の縁とかでは，わずかに色調が変わっているものです。

よく見ると，ちょうどモザイクのような感じに色どられていて，虹彩の色素の濃いものは茶に，薄いものは青になります。白ネズミ，白ウサギ，ハツカネズミなどのように，全身白色で目にも色素のないものは，眼底の血管が赤く反射して赤色の目となりますが，ネコではこの赤目はないようです。

青目のネコは，日本白ネコ，外国の短毛白ネコ，シャムネコ，白ペルシャネコ，チンチラネコ，ヒマラヤンネコなどに多く，両目の青，黄，緑などのもので，たまに青と緑，青と黄，黄と緑などの片ちんばの目もあります。目の色は，皮膚や毛の色とある意味で関連していて，複雑な形で遺伝します。

ニホンネコの場合，両目黄と両目青の親から両目黄の子が生まれます。これら２代目の両目黄の親どうしからは，両目黄か両目青の子が生まれるのです。あなたの子ネコはこの３代目の両目青のネコに当たるのではないでしょうか。たまに黄と青の片ちんばの目の子も生まれますが，いずれも視力や他の能力に異常はなく，病気ではありません。

白ペルシャネコの場合，両目黄の親どうしからたまに青目の子が生まれます。両目青の親どうしからは，青目の子は生まれないといわれています。青と黄の片ちんばの目の親どうしからは，両目黄か両目青の子が生まれます。これは，日本白ネコの場合とよく似ています。

この両目青の白ペルシャネコには，ツンボが多いことが知られていますが，短毛の白ネコは，両目青でもツンボはありません。視力はともにふつうです。一般に白ネコはペルシャでも，短毛ネコでも神経が敏感で，少し神経質です。反面，聰明で感情も豊かなものが多く，わたしたちの経験では，薬物に対しても反応が他のネコより強く，とくに麻酔剤に敏感なものが多いようです。■

仲間のひろば

キンギョとドジョウとゴンベエ

この３匹がわが家の小さなプラスチックの水槽の〝住魚〟である。はじめからのトリオだったわけではない。サクラの満開のころ，夜店で水槽と小さなキンギョ３匹を買ってきた。そう長生きするとは期待していなかったが，いちばんじょうぶそうな和金は２週間ぐらいで死んでしまった。その１週間後には，赤と白の琉金が死んでしまい，いちばん弱いように見えた赤と黒と白の美しいキンギョだけが取り残された。このキンギョも白点病にかかり，一時はだめかとあきらめながらも，塩を入れてほうっておいたら，だんだん元気になってきた。

そのころ，お隣から１年７か月になるいたずら坊主のおもちゃにと，デパートで買ってきたドジョウを１匹いただいた。いかにおもちゃにとはいえ，ドジョウもまた生きものである。坊主の気がそれた間に，水槽の中へ入れてしまった。

その夜，ドジョウは水槽から脱出を試み，げた箱のかげのほこりのなかに落ちて，そこで一晩を過ごした。見つけたときにはいまにも死にたえそうで，水に入れてもしばらくは呼吸もできない状態だったが，何度か尾をもって水のなかで振り動かしているうちに呼吸がもどり，きわめてわずかずつ元気になっていった。

そこへゴンベエが仲間入りした。買物の帰りに，小学校３年生ぐらいの男の子から，パック半分のイチゴと交換して手に入れたものである。「これがいちばんよいフナだよ」と，男の子はわたしがひろげたビニール袋の中に，水といっしょに入れてくれた。近くの高校の池からとってきたものだという。フナといったけれど，メダカのような口，スマートな姿。名まえが不明なのでゴンベエと命名した。その夜ゴンベエは，ドジョウ同様の脱出を試みた。発見が早かったので，スマートなからだを傷つけることなく，水槽で元気になった。以上３匹がわが家の仲間である。■

（山形市・鈴木明子・29歳・主婦）

裏表紙説明

アシカ　サーカスや水族館で，ボールを鼻の上にのせて，つりあいをとる芸当をしているのは，たいていはこのアシカ *Zalophus californianus* である。

芸当をしているときには，鼻先にボールがあるので，息をとめていることになるが，窒息する心配はない。水のなかでは20分近くも呼吸せずに，もぐっていられるのだから。記憶力にもすぐれていて，５年もの間中止していた芸当でも，完全に演じて見せるという。うまく芸をやってのけると，ほうびに魚をもらっているが，そのほかイカやタコも大好物である。

かつて日本海南部，とくに竹島の周辺にも，ニホンアシカと呼ばれる亜種が生息していたが，近年では見た人がない。おそらく絶滅したものと，考えられている。■　Ph. C. Lenars-Aflas Photo

ギャラリー

虎の頭部　　ドラクロワ

フランス・ロマン派の巨匠ドラクロワの手になるこの見事な水彩画は，長いこと，猫(ねこ)を描いたものと考えられて来た。しかし，最近ではその顔の解剖(かいぼう)学的構造からみて，実は猫ではなくて何か野獣，おそらくは虎(とら)の頭部を描いた習作であろうというふうに考えられている。２年ほど前，日本で開催された「ドラクロワ展」に出品されたが，その時も，カタログでは「虎の頭部」となっている。

もともとドラクロワは，若い時から野獣に強い興味を持っており，動物彫刻家として知られる友人のバリーといっしょに，しばしばパリの自然植物園に出かけて，そこの一隅(いちぐう)に飼われている猛獣たちをスケッチした。そして，バリーもドラクロワも，ともにロマン派の芸術家にふさわしく，猛獣たちの力強いドラマティックな表現を好んだから，一見猫のように見えるこの動物も，やはり虎なのであろう。特に，きっとかみしめた口のあたりの猛々(たけだけ)しい表情は，家の中でのんびり昼寝でもしているような動物のものとは思われず，毎日の闘争に生命を賭(か)けている猛獣の，緊張感を感じさせる。

この水彩画が描かれた1825年はドラクロワ27歳の時のことで，彼の名を一躍有名ならしめた「キオス島の虐殺」の描かれた翌年にあたり，まさにロマン派の運動が高揚期にさしかかろうとしていた頃である。猛獣の姿をスケッチするドラクロワの胸の中にも，激しい闘志が燃えていたに相違ない。■　　（高階秀爾）



1825年　水彩　15.8×14センチ　ルーブル美術館蔵

第１号～第64号（概説・哺乳類）のおもな内容

◉ 数字は号数，白ぬき数字は既刊

- 1 概説 I　生態学，自然保護
- 2 概説 II　動物分類学，生物学的環境
- 3 霊長目　ゴリラ
- 4 霊長目　チンパンジー，オランウータン
- 5 霊長目　テナガザル，オナガザル
- 6 霊長目　カニクイザル，ヒヒ
- 7 霊長目　キヌザル，オマキザル
- 8 霊長目　メガネザル，キツネザル，アイアイ
- 9 食虫目　ツパイ，モグラ，ハリネズミ
- 10 翼手目，皮翼目　コウモリ，ヒヨケザル
- 11 齧歯目　ヤマアラシ，チンチラ，ミズブタ
- 12 齧歯目　トビネズミ，ヤマネ
- 13 齧歯目　家ネズミ，野ネズミ
- 14 齧歯目　レミング，ビーバー，ハムスター
- 15 齧歯目　リス，ムササビ
- 16 齧歯目　ウサギ
- 17 食肉目　チーター，ライオン
- 18 食肉目　トラ
- 19 食肉目　ヒョウ，ジャガー
- 20 食肉目　ピューマ，ヤマネコ
- 21 食肉目　イエネコ
- 22 食肉目　ハイエナ，マングース
- 23 食肉目　ジェネット，カワウソ
- 24 食肉目　スカンク，アナグマ
- 25 食肉目　テン，クロテン
- 26 食肉目　ミンク，イタチ
- 27 食肉目　パンダ，アライグマ
- 28 食肉目　マレーグマ，ホッキョクグマ
- 29 食肉目　ヒグマ，ツキノワグマ
- 30 食肉目（畜犬）　盲導犬，警察犬ほか
- 31 食肉目（猟犬）　グレーハウンド，セッター
- 32 食肉目（番犬）　コリー，セントバーナード
- 33 食肉目（ペット犬）　ニホンイヌ，チワワ
- 34 食肉目（野生犬）　ディンゴ，リカオン
- 35 食肉目　キツネ，ホッキョクギツネ
- 36 食肉目　オオカミ，コヨテ
- 37 食肉目　アザラシ
- 38 食肉目　セイウチ，オットセイ，トド
- 39 奇蹄目　サイ，バク
- 40 奇蹄目　ウマ概説
- 41 奇蹄目　サラブレット，ポニー
- 42 奇蹄目　ロバ，ラバ，シマウマ
- 43 岩狸目，長鼻目　イワダヌキ，ゾウ
- 44 偶蹄目　カバ，ペッカリー
- 45 偶蹄目　イノシシ，ブタ
- 46 偶蹄目　ヒツジ，ビッグホーン
- 47 偶蹄目　ヤギ
- 48 偶蹄目　ヤギ（飼育種）
- 49 偶蹄目　レイヨウ
- 50 偶蹄目　ブラックバック，クロレイヨウ
- 51 偶蹄目　ダイカー
- 52 偶蹄目　アフリカスイギュウ
- 53 偶蹄目　ウシ，コブウシ
- 54 偶蹄目　クードウ，プロングホーン
- 55 偶蹄目　キリン，オカピ
- 56 偶蹄目　トナカイ
- 57 偶蹄目　シカ
- 58 偶蹄目　ラクダ，ラマ
- 59 貧歯目，有鱗目，管歯目　アリクイほか
- 60 海牛目，鯨目　ジュゴン，ナガスクジラ
- 61 鯨　目　イルカ，マッコウクジラ
- 62 有袋目　カンガルー，コアラ
- 63 有袋目　バンディクート，フクロネコ
- 64 単孔目　カモノハシ，ハリモグラ

以下65～128　鳥類　129～144　両生類，爬虫類
145～160　魚類　161～192　昆虫類，甲殻類

世界動物百科　通巻25号　昭和46年8月29日発行（毎日曜日発行）　編集・発行人　大田信男　発行所　朝日新聞社　東京 大阪 北九州 名古屋　印刷・凸版印刷　**定価220円**



アシカ　説明 30ページ